

●モノグラフ小学生ナウ



基本的生活習慣

vol.2-9

© 1982 (株)福武書店 教育研究所/加藤智穂・賀川雅子・阿部悦子
東京学芸大学助教授 深谷和子・東京都西多摩郡羽村町立小作台小学校教諭 金子純江



目次

特集／やわらかな言葉のしつけ	2
調査レポート／基本的生活習慣	
提言と要約	8
1. 基本的な習慣形成について	10
● 身の自立と整理	10
● 健康の習慣形成	14
● 勉強の習慣形成	16
● 日曜日の暮らし	19
2. あいさつの習慣形成	22
● 食卓でのあいさつ	23
● 家族間でのあいさつ	24
● 他人へのあいさつ	26
● 成長につれてどうなるか	27
● 習慣形成と家族の雰囲気	29
3. テレビと間食をめぐる	31
● テレビをどう見ているか	32
● テレビについての約束	33
● 間食をめぐる	35
まとめに代えて	38
シリーズ／子ども考現学	
子どもの姿・昔と今(7) 学級委員	40
資料1・調査票見本	45
資料2・学年・性別集計表	51

特集 ●

やわらかな言葉のしつけ

—今、しつけで失われているもの—

東京学芸大学助教授 深谷和子



やわらかい心の希求

既刊の「モノグラフ小学生ナウVol.1-7」
(叱り方と子ども)を見ていたら、こんな数字
が目に入ってきた。

〈両親の叱り方についての子どもの不満〉

「お母さんは、おこる方が多くて、あまりほめてくれない」

・とてもそう思う	4.7%	} 27.1%
・わりとそう思う	6.8%	
・少し、そう思う	15.6%	
・あまりそう思わない	35.5%	} 72.9%
・ぜんぜんそう思わない	37.4%	

実はこの調査票を作った時に、筆者はこうした親への不満(あまりほめてくれない)が、もっと多くの子どもたちの間にあると予想をしていたのである。なにしろ筆者の育った時代の親たちは、どの家庭でもやたらにしつけが厳しくて、子どもは、叱られるのが商売みたいなものであった。しかし出てきたデータにこの数字を見つけた時、予想していたよりこうした不満がずっと少なかった(約3割)ことに、少し驚いた。時代は移り変わって、確かに今の親たちは全体にやさしくソフトになってきているのであろう。

しかし親たちが、子どもを見る目はやさしくなったかもしれないが、いったいそれではそれに匹敵するほど、おとなたちの間のお互いを見つめ合うまなざしはやさしくなったのであろうか。そうではなさそうである。

われわれが旅先で、日頃すっかり忘れていた人間の「やわらかい心」に触れて、感動することがある。とくに大都市に住んでいる者は、地方の人びとが、旅行者である自分にかけてくる言葉の「数」の多さ(やわらかなトーンを持った)に、一瞬軽いとまどいすら覚えてしまう。そしてふと気づくと、それまでの自分

の日常が、「硬い心」を持ちながら忙しく行き来する、大都市特有の人間関係の中にいたのだと思ひあたる。その硬さに慣れてしまった自分を、こわいとも思う。しかし都会に戻って何日もしないうちに、また「硬い心」にパッと逆戻りし、冷たい都市の暮らしにしっかりと適応している自分を見つけることになる。日本全体が、20年前30年前と比べると、こわいほどの速度で都市化してきていることを考えると、親が子どもに対してやさしくなったのはまったく逆に、おとなたちはお互いに冷たいまなざしを投げあうことがあたり前のようになってきているのであろう。

しかし、小さい子どもたちと違って、ある程度の自我確立のできたおとなたちは、特に他人からのやわらかい心や、暖かい言葉を必要としなくなっているか、というところではないのだと思う。人間はおとなになって何十年の歳を重ねても、いつも他人からのそうした暖かいまなざしや言葉を期待しているものではないだろうか。

「巧言令色少なし仁」の国

そのことに気づいたのは、10年ほど前に初めて外国へ出かけた時のことである。初めて出かけたアメリカで、筆者はアメリカ人たちの快活で、気さくで、人見知りをしない態度に、どきもをぬかれたのである。

例えばホテルでのエレベーター。朝食にとコーヒーハウスへ降りて行こうとすると、止まった階ごとに乗り込んで来る人びとが、ごく自然に「Good morning」と言い合う。日本だったら、電車の中などで知らない人に物



を言いかけるのは、老人と決まっているようなものなのに。

レストランに入っても、ウェイターや、レジの女の子たちと、客たちはしょっちゅう何か言葉を交わし合って、お互いに何やら愉快そうに笑い合っている。料理を運んで来たり皿を下げて来るウェイターやウェイトレスが、「これを食べてみないか?」とか「おいしかったか?」とか「デザートを食べたら?」などとやたらにニコニコ話しかけるのは、チップをもらいたいばかりではなさそうである。中には「マダム、その服はすてきですね。よくお似合いですね。」などと言ってくれる人もいる。

そんな暮らしを3週間もして日本に帰ってきてみると、2、3日は何やら周囲の人びとがこわいような気がして仕方がない。レストランへ入ったって、「いらっしゃいませ」もや

つとで、メニューは黙ってヌツと出てくる。客もニコリともせず「Aサラダ」とぶっきらぼうに言い、ウェイトレスも「Aサラダですね。」とこれまたニコリともせず復唱してさっさと行ってしまふ。それがあたり前だと思つて長年暮らしてきたのだが、彼の国の気軽でなごやかな会話のとび交う風景を思い出すと、もう少しなんとかならないものかと思つてしまふ。

しかし考えてみると、日本では昔から、「巧言令色少なし仁」などという格言があつて、やたらに物を言うこと、特にお世辞っばいことを言うのをいましめる風土があつた。人から何かしてもらつた時に、わずかに「ありがとう」を言うぐらいで、少なくともこちらから積極的に相手をほめたりすることは、親からも先生からも仕込まれなかつたように思う。

しかし外国で暮らしてみると、そのちょっとお世辞っばいやりとりが、なかなか気持ちのよいものだ、と思えてくる。しかもそれが、お互いに利害関係のない、ほとんど一期一会の人びととの間で交わされるのは、いいものである。職場の上司のところへ行って「おはようございます、課長。すてきなネクタイをしておいでですね」などと言うのは、ゴマスリの意図がなくてもそれらしく見えていやだが、町の食堂で、「ハンバーグが、とってもおいしかったわ」とか、「きれいなお店ですね。」などと言うのは、下心や野心とは関係ないのだから、もっと自然に出てきていいはずなのである。われわれにその習慣がないだけで、やってみるとなかなか気持ちのよい雰囲気生まれてくる。

そうしたことを考えると、われわれ日本人の場合、「しつけ」の体系にどうもこうしたやわらかな言葉にかかわる部分が欠けていたのではないかと思えてくるのだが、どうだろうか。

体で覚えるしつけ

この間新聞を読んでいたら、どこかの観光地で、「道を聞いた後で、お礼を言わない人からは100円いただきます」と貼り紙をした茶店がある、という記事がのっていた。最近の若者は、あまりに礼儀を知らなすぎる、というのが茶店の老主人が、そうした貼り紙を出すに至った経過であるらしい。しかし若者は礼を言うことを「知らない」のではなくて、知っているののだが、それが習慣的に口をついて出るほど身につけていないということなのであろう。何事も「頭で覚える」ことでは本当

に覚えたことにはならないとされる。つまり、その後にさらに「体で覚える」ことまでをさせないと、わかってはいても、実際の場では役立たないのである。しかし大切なのは実際にそれができかどうかなのだから、「頭だけで覚えている」のでは、まったく何も覚えていないのと同じことになってしまうのである。

学校という場を考えてみると、やはりそこでは「頭で覚えさせる」ことだけが精一杯なのではないか、という気もする。最近の家庭教育はなっていない、という声もよく聞かれるのだが、「体で覚えさせる」つまり実生活での「体験」を与えるのは、やはり家庭や地域の役割ではないのであろうか。あまり学校に頼り



すぎているのでは、「頭でしか知らない」人間ができ上がってしまうことを十分承知していなければならないであろう。

やわらかな言葉のしつけ

少し話はあちこちにとんでしまったが、要するに、日本の「しつけ」は、とかく基本的生活習慣の形成や、礼儀作法の中でも「立ち居ふるまい」に主眼が置かれて、いわゆる言葉のしつけが忘れられているような気がする。そしてわずかにある言葉のしつけの中でもせいぜい「おはよう」「さようなら」「ありがとう」などきまり切ったあいさつについて、問題に



するぐらいのところである。しかもそうしたパターン化したあいさつですら、先の茶店の主人の言い分を見てもわかるとおり、きちんと体に教え込む人は、いなくなってしまうとも言えよう。まして欧米の人たちのように、相手を思いやりながら、ウィットに富んだ言葉を交わし合う、などという「やわらかな言葉のしつけ」は誰も教えようとしないのである。

しかし実はこのことこそ、少し子どもたちが大きくなってまあ基本的生活習慣のしつけが身についてきたら、ぜひ教えてやりたいものだという気がする。楽しいもの、きれいなもの、すばらしいもの、いいもの、すごいもの——人と人との間でとにかく何か心に触れるものに出会ったら、恥ずかしがらず、すなおに口に出す習慣を作ることだろう。しかもそれを「ほめる」という形ですることが、新しい言葉のしつけの入門なのかもしれない。

人間は誰でも、いつも誰かにほめられたがっている生き物、という気がする。その昔、ずっと昔、幼かった自分が、母親にそうしてもらったと同じやり方で。

しかし「ほめられたい」というのは、そうした幼児的欲求の発現、というような理解の仕方をしてだけでは不十分だろう。むしろそれよりも、人はほめられることで、この人生において、自分の人生が、自分にとって意味があるだけでなく、他からもまた認められ、理解され、評価される人生なのだ、というひそかな確信を手に入れることに役立つのだろう。さらにもう一つ、いつもわれわれは、孤立して生きるのではなく、他人から関心を持たれ、他人と同じように生きたいとする欲求を持つ



ている。ささいなことにせよ「ほめられる」ことはそのあかしでもあると、感じられるだろう。

とすると、日常のごく小さい事柄へのちょっとした言葉のやりとりは、われわれの「内的安定感」をもたらす大切な機能を果たしているとも言えそうである。

しかもその言葉のやりとりは、相手を「ほめる」という精神を含んではいるものの、ほめるというより「相手に関心があることを示す」というタイプのものなのかもしれない。「このスープはおいしいですよ」というウェイトレスの言葉は、「私はあなたに、今日のいちばんのメニューを召し上がっていただきたいのです。私にとって、あなたは大切な人なので。」ということになり、「おいしかったわ。ごちそうさま。」という言葉は、「私のために、おいしいものを用意してくださってありがとう。そのおかげで、私は楽しい夕食をとることが

できました。」ということを、言外に含んでいる。そのまま表現したら、日本人にとっては、いささか歯の浮くようなやりとりを、ひそかに小さい言葉の中に込めて表現する。本当は、日本人は昔から、こうした小わざが、得意だったはずである。今でも年輩の人びとが、「いつもお心にかけていただきまして」「いえ、ゆきとどきませんで、ご無礼申し上げました」などとあいさつしているのは、いささか古色蒼然として時代がかっているものの、そうしたやわらかい心のやりとりの一端だったのだろう。現代では、それに代わるナウいあいさつが、もっと日本語の中に生まれてきてもよさそうだが、まだそれができていない。

日本人の「しつけ」の現状は、言葉に限らず、今たくさんの課題をかかえている。しかしその中で、社会性を持った言葉のしつけの確立を望みたいものである。

調査レポート／基本的な生活習慣

東京学芸大学助教授 深谷和子
東京都西多摩郡羽村町立小作台小学校教諭 金子純江

提言

ありふれたことのようにだが、小学校入学に至るまでの「基本的な生活習慣の形成」のためのしつけを、ここでしっかり見直すべきであろう。全体として子どもたちの習慣形成は、大きく遅れており、しかも本調査で見い出された限り、2年生以降学年を追ってもそうした習慣が次第に確立していく傾向は見い出されない。むしろ低学年で確立していた習慣が、

その後次第に崩れていく傾向すら、顕著である。そのためには、家庭教育のあり方について、今こそ十分な見直しが必要であろう。また学校側は、自信を持ってそうした「しつけ」の要求を、家庭にしていくべきであろう。「学校教育」と「家庭教育」の守備範囲の明確化、正しい線引きこそ、望まれるところであろう。

要約

① 男子の習慣形成の遅れ

いわゆる「基本的な生活習慣」やその周辺領域をめぐって行われた今回の調査において、男子には、ほとんどの項目で女子よりも習慣形成の遅れが見い出された。



② 崩れていく習慣形成



調査に用いられた約70項目のチェックリストのうち半分ぐらいの項目では、2年生から6年生へと学年の上昇にしたがっていったん形成された習慣が次第に崩れていく。また残りの半分も、ほとんど変化を見ない。すなわち、習慣形成の多くは、小学校入学ぐらいまでに確立しておかないと、その後の進歩を期待することはできないようである。(図18、図19)

③ 宿題

6年生になっても「言われなくても必ず宿題をする」子どもは38%、「言われなくても必ず宿題以外の勉強をする」子どもは22%でしかなく、他の領域と比べて一段と習慣形成の立ち遅れが見られる。(図8)



④ 「あいさつ」は家庭の雰囲気から



「いただきます(夕食)」に例をとると、「必ず・だいたい言う」母親の夫は6割がやはり「必ず・だいたい言う」が、「あまり・ぜんぜん言わない」母親の夫は、やはり8割が言っていない。同様に「ごちそうさま(夕食)」に例をとると、必ず言う子どもの母親は、7割がやはりそれを言うが、言わない子どもの母親は、やはり7割がこれまた無言である。(表3・表4)

⑤ 教育ママ

「礼儀正しい」「きれい好きな」「きちょうめんな」母親の子どもは、そうでない母親の子どもより、より十分な習慣形成ができている。しかし「しつけに厳しい(と子どもに見られている)」「成績のことにうるさい」母親かそうでないかは、習慣形成とほとんどかわりが見られない。したがって、教育的な母親(教育ママ)よりも、むしろ「礼儀正しく、きちんとした」母親の方が、より子どもに教育的な存在とってよいのではないだろうか。(表5)

サンプル数 (人)

学年\性	男子	女子	計
2年	109	101	210
4年	359	334	693
5年	185	150	335
6年	181	159	340
計	834	744	1,578

調査概要

対象●東京都の小学2・4・5・6年生
計1,578名
時期●昭和57年6月
方法●学校通しによる質問紙調査

1. 基本的な習慣形成について



人は、一生の中でいったい何回、手を洗うのだろうか。食事の前やトイレの後、その他手が汚れたと感じた時、何千回、何万回、ひよっとしたら、もっと多く手を洗っているのかもしれない。

確かに、私たちは毎日顔を洗い、歯をみがき、自分の身のまわりの物を片づける。このような毎日の行動は、おとなになればもはや身につけてしまっている“習慣”である。とすれば子どもの頃から形成された基本的な習慣は、環境の変化などによって一時的に崩れることはあっても、まったく消失してしまうことなく、生涯その人の身につけていく“財産”

のようなものと考えられる。

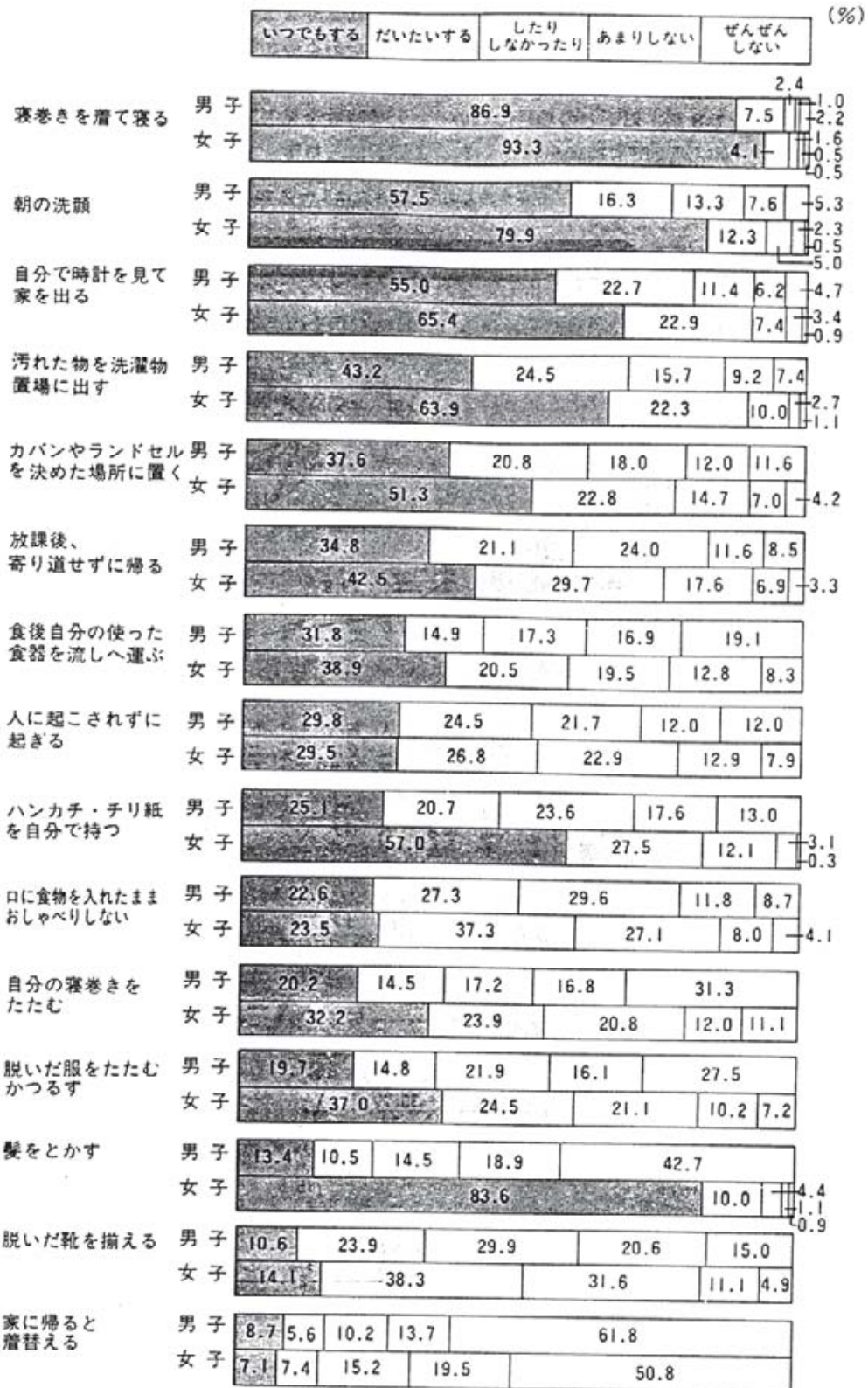
このように、「基本的習慣」は、私たちが健康的な、あるいは、けじめのある社会生活を送ろうとする時のかけがえのない“財産”であればこそ、おとなは子どもに口うるさいくらいしつこく、「ごはんの前には手を洗いなさい。」「早くお風呂に入りなさい。」「遊んだ後は、必ずおもちゃを片づけなさい。」などくり返すのであろう。

さて、子どもが物心つく以前から開始される基本的習慣確立のためのしつけは、小学生の場合、いったい十分な実を上げているのだろうか。

● 身近の自立と整理 ●

まず図1は、自分の身のまわりの世話を子どもが自分自身でどのくらいしているかをみ

図1・身の自立と整理



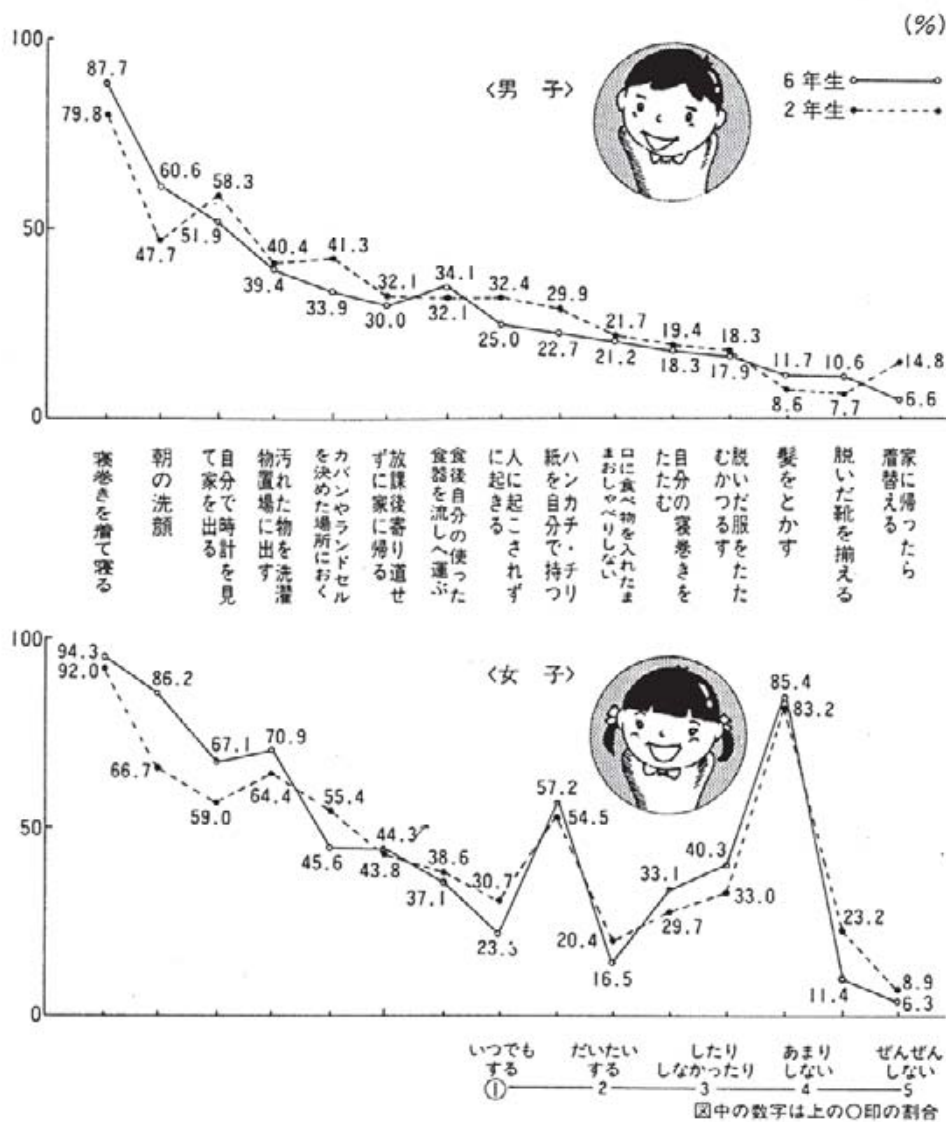
たものである。定着率の高い順に見ていくと、大部分の子どもがしていることは、寝る時に「寝巻きに着がえる」こと*で、男女ほぼ9割と、群をぬいた実行率である。そして、「いつでも」顔を洗ってから学校へ行く子どもは、男子で6割、女子で8割。以下どの項目につい

ても、女子の方が習慣形成においては高率を示す。しつけが、特に女子の方に厳しいのか。それとも女子の方に生まれつきとも言える何かがあるのか。

そして3番目に定着率の高いのが、「自分で時計を見て家を出る」で、全体として6割

*巻末にも付記したが、数字は4、5、6年生のもので、2年生はトータルには含まない。

図2・身の自立と整理(学年別)



が定着。4番目が「汚れた物を洗濯物置場に出す」で5割。しかしその後から定着率はぐっと低下して、次第にみじめと言えるような状態が出現している。「いつでも」だけでなく、「だいたい」を合わせても半分か、それ以下の定着率でしかない。小学校の4、5、6年生になっても、基本的な生活習慣は、こんなにも身につくものなのか。

また、これらの習慣を2年生と6年生について比較してみたのが図2である。

それぞれの項目に「いつでもする」と答えた子どもの割合は、2年生と6年生のグラフがからみ合うように上下しており、ふつう予想されるように、2年生より6年生の方に、習慣形成ができているとは言い難い。男子を例にとれば、15項目中、2年生の方がかえって高い割合を示す項目が5つ、ほぼ同じくらいが5つ。6年生の方が高い割合を示すのは、

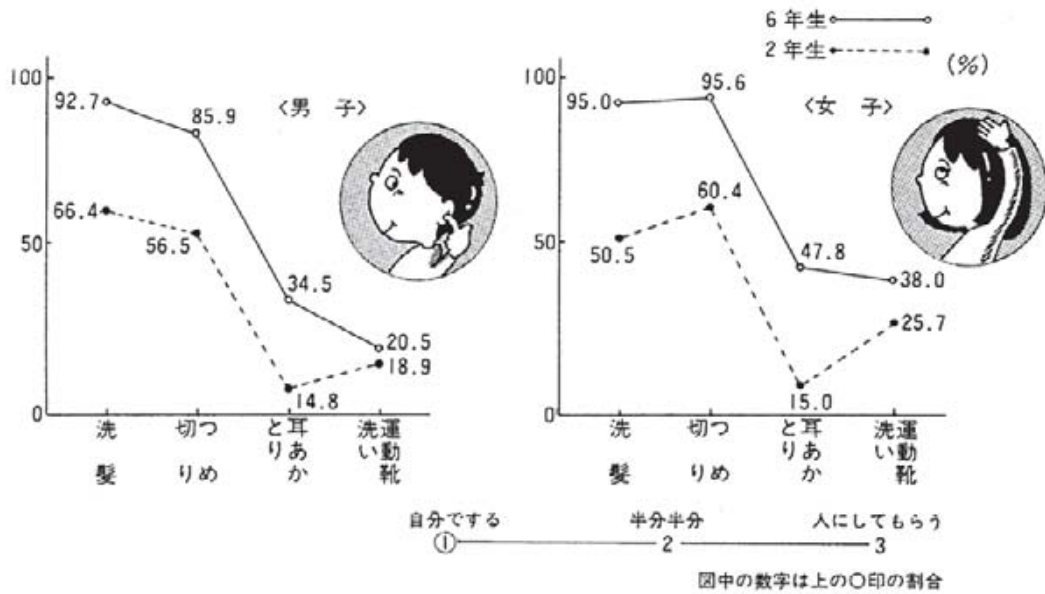
「寝巻きを着て寝る・朝の洗顔・食後自分の使った食器を流しへ運ぶ・髪をとかす・脱いだ靴を揃える」の5つでしかない。また女子は、いくつかの項目を除いては、全体に、2年と6年で差がない(進歩しない)傾向が見出される。換言すれば、これらの習慣は、2年生の時点で習慣化していないようなら、もうこの先身につく見込みは薄いということかもしれない。実際ここに挙げた項目に、とりたてて難しいことがあるわけではなく、要は心がけ次第というようなものなのであるから、この結果は当然かもしれない。

そこで、図3には、「洗髪・つめ切り・耳あかとり・運動靴洗い」と、子どもにとって多少技術のいりそうなものを挙げてみた。これらの学年差は図4にあるように、2年生に比べて6年生の方がかなり「自分でしている」ことがわかる。

図3・洗髪や耳あかとり

		(%)		
		自分でする	半分半分	人にしてもらう
洗 髪	男 子	80.4	14.6	5.0
	女 子	80.1	14.8	5.1
つめ切り	男 子	73.0	18.2	8.8
	女 子	82.4	12.0	5.6
耳あかとり	男 子	26.2	24.1	49.7
	女 子	31.9	23.2	44.9
運動靴洗い	男 子	19.2	37.8	43.0
	女 子	32.8	45.8	21.4

図4・洗髪や耳あかとり(学年別)



健康の習慣形成

次に手を洗うこと、歯をみがくことなどを中心に、子どもたちが、健康のための習慣をどのぐらい身につけているかを見てみよう。(図5)

「手を洗う」ことに着目すれば、よく行われている順に「大便の後」「給食の前」「小便の後」となっていて、ここまでは男子でも半分以上の子どもが「いつでも」手を洗っている。しかし、同じ手を洗うことでも、「朝食の前」や、「掃除の後」は、あまり行われていない。

歯みがきについては、朝・晩の歯みがきを「いつでも」する子どもは、半数を超えるが、給食の後歯をみがくとか、口をすすぐかを「いつでも」する子どもは1〜2割となっている。学校生活の中で給食の後片づけには、いつもあわただしさが伴っているためであろう。家庭ではきちんと歯をみがいている子どもでも、学校では給食の後歯みがきはおろか、口をすすぐことさえしていないとなると、学校現場にいる者としては、考え直してみなければな

らない気もする。このあたりは歯科医師たちを中心に、学校側や子どもたちの意識の啓蒙に努めてもらうのもひとつだろう。

さて図6は、学年間の比較である。2年生と6年生をとってみると、やはり、男子で3分の1、女子では半分の項目において、習慣形成の崩れが見られる。はっきりと学年の上昇に伴って実行率が高くなっているのは、

男子○入浴で体を洗う

○大便後の手洗い

○小便後の手洗い

○朝食前の手洗い(洗面のついで?)

女子○給食前の手洗い

○小便後の手洗い

○朝の歯みがき

○夕食前の手洗い

○朝食前の手洗い(洗面のついで?)

ぐらいで、他は大差がないか、逆に低下している。

図5・健康の習慣形成

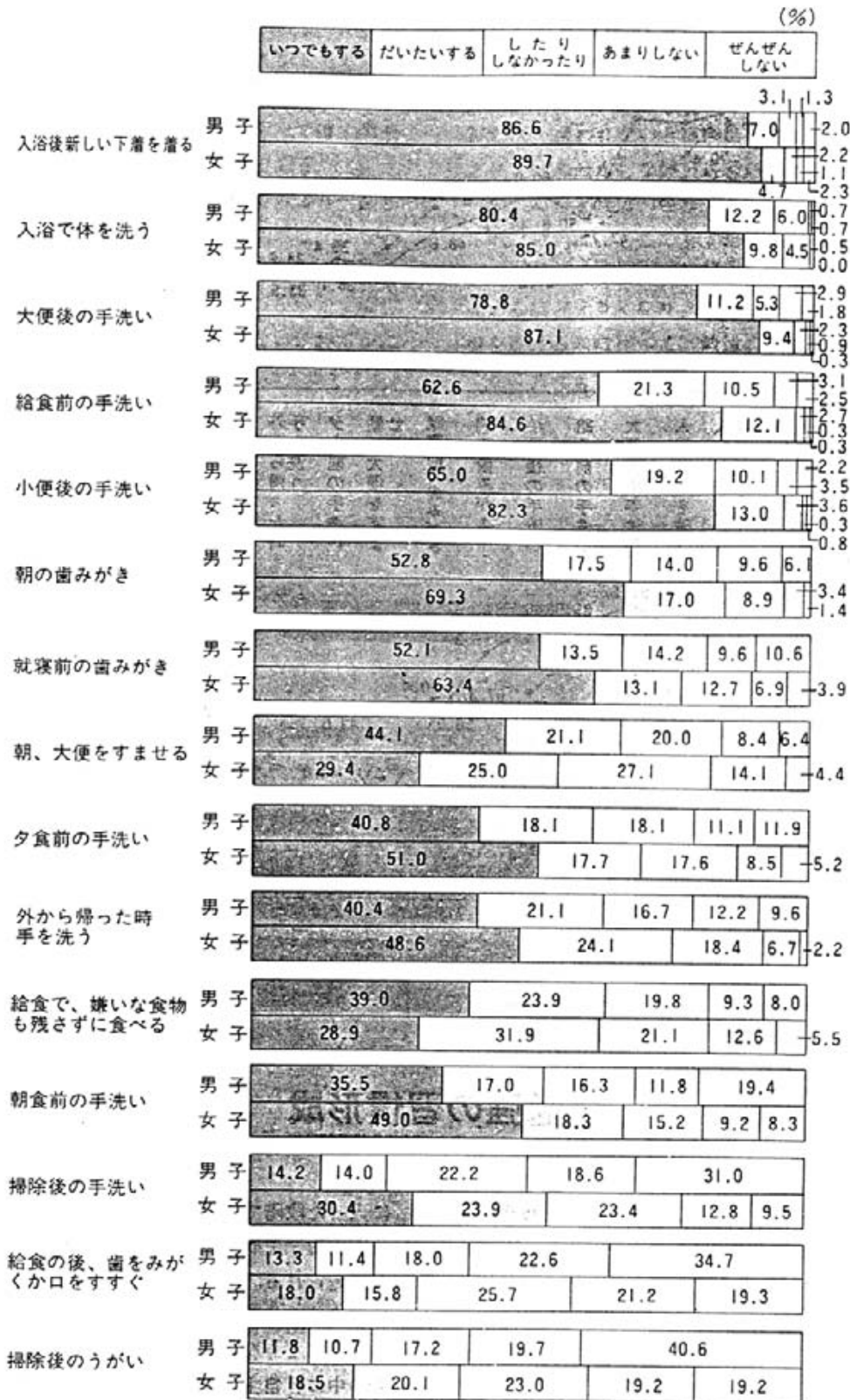
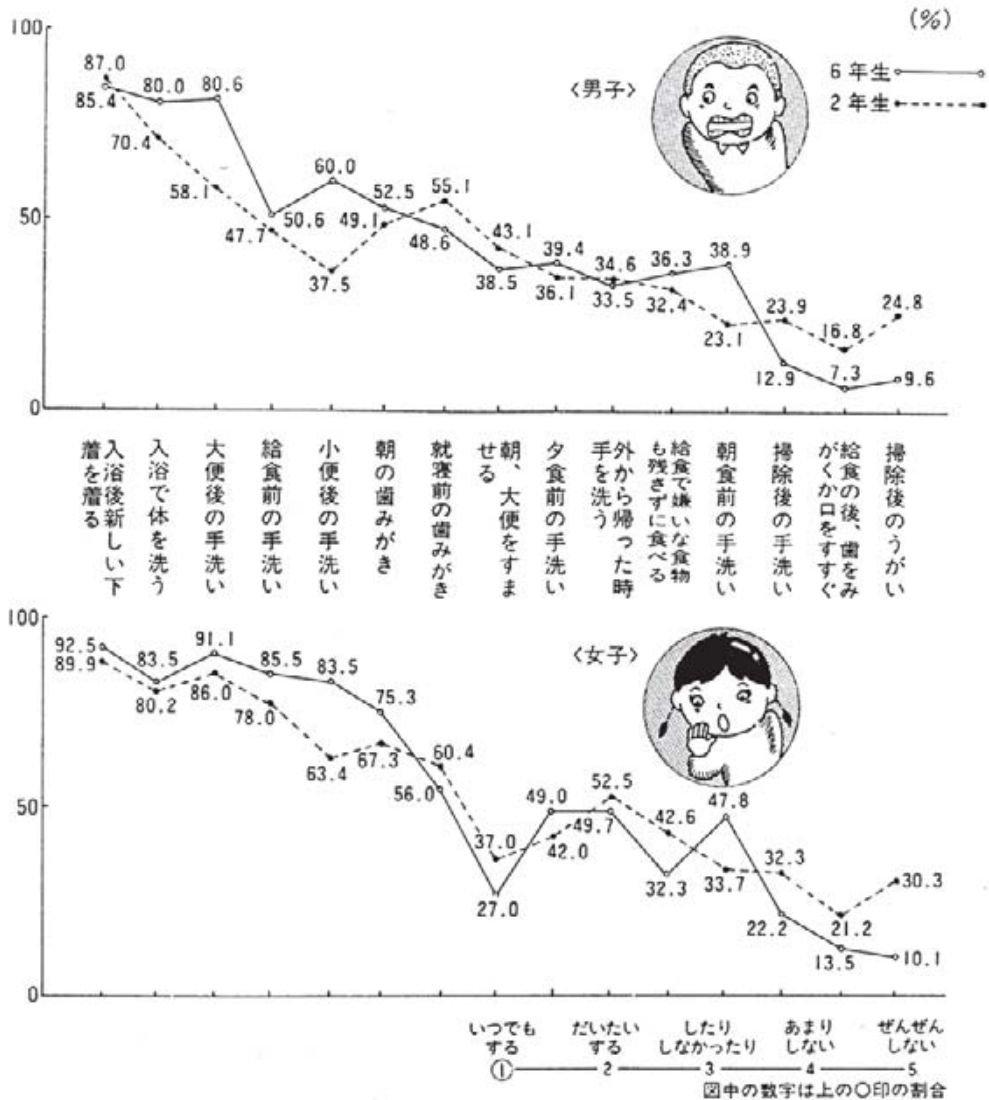


図6・健康の習慣形成(学年別)



勉強の習慣形成

これまで見てきたように、身のまわりの自立や健康については、ごく一部の例外を除いて、2年生も6年生も、習慣として定着している子どもの割合は違いが認めにくかった。生活に関連したそれらの習慣形成は、ずっと早い時期からしつけが行われてきて、小学校

に入った段階では、すでにその答え(習慣形成の成功・失敗)がほぼ出てしまっているとも考えられる。では入学後に始まる勉強の習慣形成はどうだろうか。

言うまでもなくわれわれ親や教師は、子どもの中に、自主的な勉強態度を育てたいと願

っている。しかし図7を見るとまず全体として、そうした態度がきわめて貧弱にしか育っていないことに気づく。まあまあなのは「時間割調べ」ぐらいで、「言われなくても必ず宿題をする」子どもは男子30%、女子で45%に過ぎず、宿題以外の勉強に至っては、男子17%、女子で23%という惨状である。

これをさらに学年別に追ってみよう。図8を見ると、ここでもまず学年別の変化がない点に驚かされる。他の領域と違って、2年から6年にかけて下降こそしていないが、決して定着率の上昇は見い出されない。わずかに「言われなくても宿題以外の勉強を必ずする」子どもが、2年、4年、5年と21%、21%、15%といったんはやや低下したものの、6年

で22%と上昇する。それぐらいがせめてもの6年生の面目というところである。しかし6年生でも「必ず」「だいたい」を合わせて40%という数字では、最上級生の資格があるのかどうか。しかもよく見ると、6年生になっても27%は、言われないと宿題以外の勉強を「あまり・ぜんぜんしない」らしいのである。また図7にもどれば、こうした習慣形成ができていないのは、ここでもまた男子である。

それにしても、小学校の6年間で体格は見違えるほど大きくなり、学習内容も格段の進歩を遂げるのに比べて、勉強の習慣形成はまことにおそまつなのは、いったいなぜなのだろうか。

私たち現場の教師は二言目には、「自主的

図7・勉強の習慣形成

		(%)				
		いつでもする	だいたいする	したりしなかったり	あまりしない	ぜんぜんしない
夜のうちに、時間割を調べる	男子	45.4	16.3	15.2	10.7	12.4
	女子	62.2	20.2	10.2	-4.1	3.3
言われなくても宿題をする	男子	29.8	29.8	24.6	10.0	5.8
	女子	45.0	35.7	13.7	1.4	4.2
言われなくても宿題以外の勉強をする	男子	16.6	16.5	24.3	22.7	19.9
	女子	22.9	21.6	31.5	16.9	7.1

に」とか、「自分から進んで」などと言い、主体的な子どもたちを育てたいと念願しているが、生活に関連した習慣にせよ、学習についての習慣にせよ、こども学年差が認められないという事実は、筆者らにとって大きな驚きであった。

しかしまた、視点を変えてみると、今回の調査を逆に指導に生かすことはできるように思える。学校の年度始めに新しい学級が編成され、学級を受け持ってしばらくすると、し

っかりした学級になりそうとか、だらしない子どもが多いようだとか、漠然とした印象を持つ。その時期は、その後1年間の指導の目標や方法を探る重要な時期でもある。その時に今回の調査を行ったならば、単なる印象ではなく、かなり客観的な、その時点の学級の子どもたちの生活のようすや自主性のデータを得られ、1つの指導上の目標を明らかにすることができるのではないだろうか。

図8・勉強の習慣形成(学年別)

		(%)			
		必ずする	だいたいする	したりしなかったり	あまり・ぜんぜんしない
「夜のうちに時間を調べる」	2年	59.6	15.9	12.0	12.5
	4年	58.1	17.4	11.9	12.6
	5年	47.8	21.9	12.0	18.3
	6年	49.6	15.7	15.4	19.3
「言われなくても宿題をする」	2年	38.3	25.8	16.3	19.6
	4年	36.2	32.1	19.2	12.5
	5年	37.4	31.4	20.1	11.1
	6年	38.1	34.5	19.5	7.9
「言われなくても宿題以外の勉強をする」	2年	21.0	22.9	16.6	39.5
	4年	20.8	19.3	24.5	35.4
	5年	14.8	18.7	29.4	37.1
	6年	21.9	18.3	32.6	27.2

日曜日の暮らし

待ちに待った日曜日。学校というものは、ふだん子どもをこんなにも圧迫していたのだろうか。図9に示したように、起こされずに自分から起きる子どもは、平日の倍近くになっている。

しかし遠足の日やおとなのゴルフの時と違うのは、図10に示したように、起きる時刻が遅い子どもが多いことで、この日ばかりはお母さんもゆっくり寝かせておいてくれるのか。家中が朝寝を楽しむ“寝てよう日”なのか。中には表1に示したように、ふだんより3時間

以上も遅く起きる子どもが、3割も出てきている。

当然図11に示したように、朝食もいつもより遅い子どもが7割。さらに表2に示したように、3時間以上も遅く朝食をとる子どもが、4割もいるわけである。

ではこうした“素晴らしい日曜日”に、ふだんの習慣はどうなるのだろうか。図12に平日と比べた結果を示した。全体としては、日曜日の方がさすがに1~2割実行率が減ってはいるものの、思ったより大きな崩れではない。やはり習慣というものは、一度形成されてしまうと、それほど大きく崩れることはないだろう。このことから、幼少期から、きちんとした習慣形成をさせることの必要性が浮かび上がってくる。

図9・起こされずに自分で起きる子ども



図10・日曜日の起床時刻

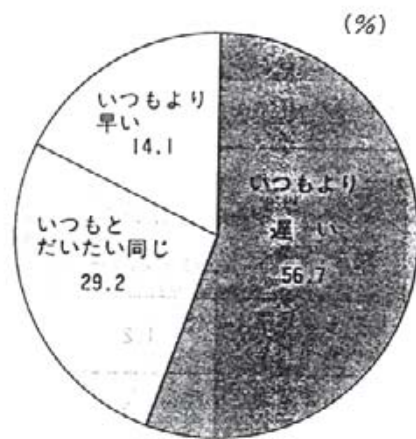


表1・日曜日の起床時刻(平日との差)

(%)

項目	月曜日～土曜日の起床時刻との差				
	1時間未満	1時間～ 1時間半未満	1時間半～ 2時間未満	2時間～ 3時間未満	3時間以上
いつもより早く起きる子ども	4.2	13.4	16.4	12.8	53.2
いつもより遅く起きる子ども	2.8	20.2	27.1	18.2	31.7

図11・日曜日の朝食

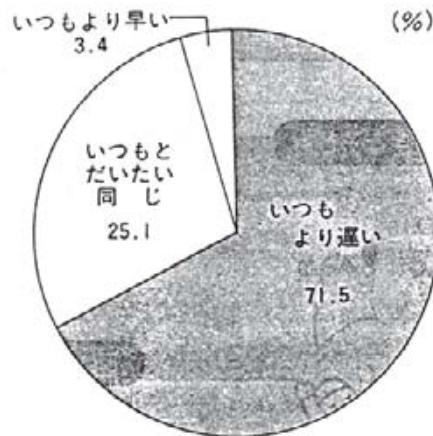
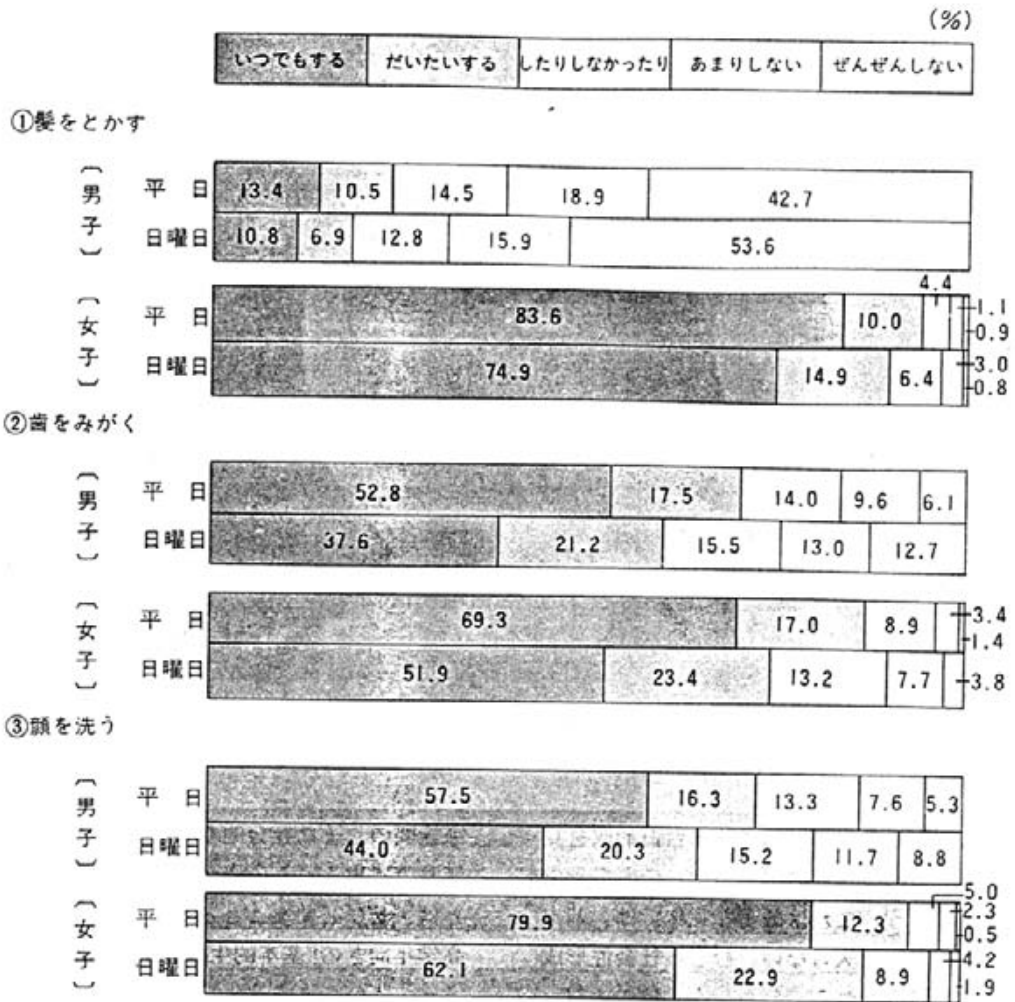


表2・日曜日の朝食時刻(平日との差)

(%)

項目	月曜日～土曜日の朝食時刻との差				
	1時間未満	1時間～ 1時間半未満	1時間半～ 2時間未満	2時間～ 3時間未満	3時間以上
いつもより早く食べる子ども	1.2	12.9	9.4	10.5	66.0
いつもより遅く食べる子ども	1.7	15.1	19.9	24.5	38.8

図12・日曜日の朝の身じたく



2. あいさつの習慣形成



日常生活の中での基本的な習慣形成を見てきたところで、次に「あいさつ」の習慣形成に目を移そう。これは厳密な意味では、基本的な生活習慣には入らない。むしろ社会性形成の一部と考えられる。しかし小学校の4、5、6年生という年齢段階を考えると、こうした

家族間の、また社会的な場での「あいさつ」が、無意識に出るくらい確かに身につけていることは、ぜひ必要なことと考えられる。いわば高学年向けの「基本的な生活習慣」のジャンルと考えてよいであろう。

食卓でのあいさつ

まず図13は、食事の時の「いただきます」「ごちそうさま」について、朝・昼・夜と、その様子を見たものである。まず特徴的なのは、食事場面のあいさつが、他の2つの領域に比

べて非常に実行率が高いことで、「必ず言う」は5～9割にも達している。しかしよく見ると、1日のうちで、給食時が群をぬいて高い。「いただきます」「ごちそうさま」ともほぼ9割

図13・食卓でのあいさつ

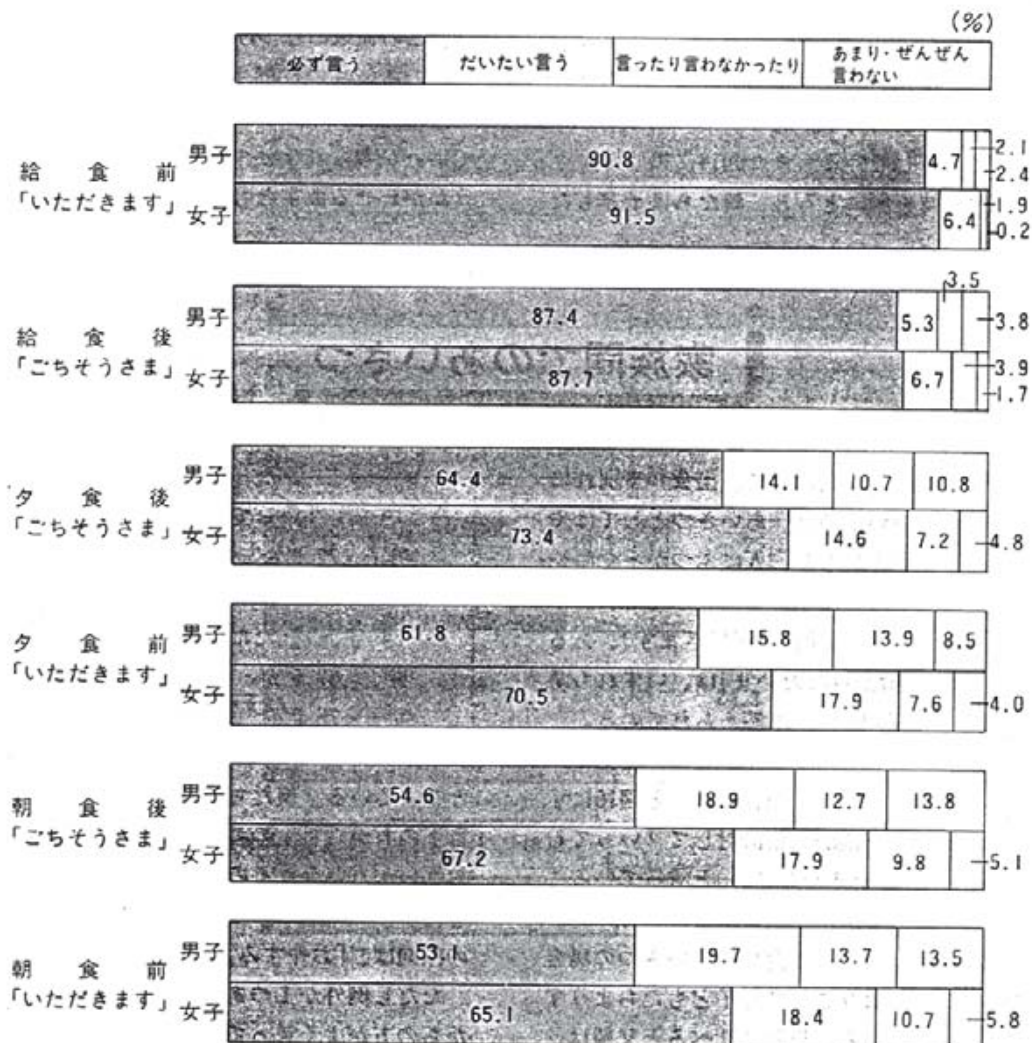


図14・食卓でのあいさつ(親)

		(%)			
		必ず言う	だいたい言う	言ったり言わなかったり	あまり・ぜんぜん言わない
夕食前に 「いただきます」	母親	54.4	18.4	14.6	12.6
	父親	38.4	18.1	16.8	26.7
夕食が終わって 「ごちそうさま」	母親	52.3	17.9	15.2	14.6
	父親	39.2	16.9	16.2	27.7

の子どもが「必ず」言っている。これは多分、学級での指導が徹底している結果であろう。その証拠に朝食時と夕食時はその割合が5～7割に低下している。また図14に掲げたように、夕食時を例にとると、親たちは子どもたちよりさらに言っている割合が少ない。つま

り、この領域のしつけは、学級での指導（給食時のあいさつ）が、家庭のしつけをひっぱり上げている、といった形になっていると見てよいかもしれない。家庭教育の衰退ぶりをうかがわせる数字とも見ることができそうである。

家族間でのあいさつ

次に図15は、家族の間で、出会いや別れに交わされるあいさつと、あいさつとしてはややハイグレードなもの、人にぶつかった時や人の前を通る時の細やかなあいさつを、掲げておいた。家を出る時(いってきます)、あるいは帰って来た時(ただいま)は、いずれも7～8割から「必ず言う」と答えられている。

この点に関して家族を見送ったり迎えたりすることの多い母親の場合をとると図16に示したように、7割が家族に対して「いってらっしゃい」「おかえりなさい」と言っていることがわかる。では積極的に親たち自身のあいさつぶりとは、となると、食卓のあいさつの場合と同じく、やはりここでも子どもたちよりする率が減っている。母親に比べると父親は、さらに1割以下の減少ぶりである。子どもと同性の親を比較してみると、

「いってきます」			
男子	72.6%	父親	54.1%
女子	84.8%	母親	65.7%
「ただいま」			
男子	67.5%	父親	59.1%
女子	75.0%	母親	68.5%

となっている。親たちの中には、あいさつは目下の者から目上の者に対して言うもので、お互いが言い合うものではない、という感覚を持っている者がいるのかもしれない。同様の傾向は、「おやすみ」にも表れている。

ただし例外が1つあって、「おはよう」は親たちの方がよく言っている。

最後に図の下部、人にぶつかったり、人の前を通る時、「ごめんなさい」とあいさつする

かどうかを見てみよう。この両方とも、他のあいさつに比べると、著しく実行率が低いことがわかる。特に「人の前を通る時」のあいさつは、むしろしない方が一般的になっている

かにも見うけられる。日本的な古きよき時代のしつけ、といったものは次第に失われていくのであろう。

図15・家族へのあいさつ

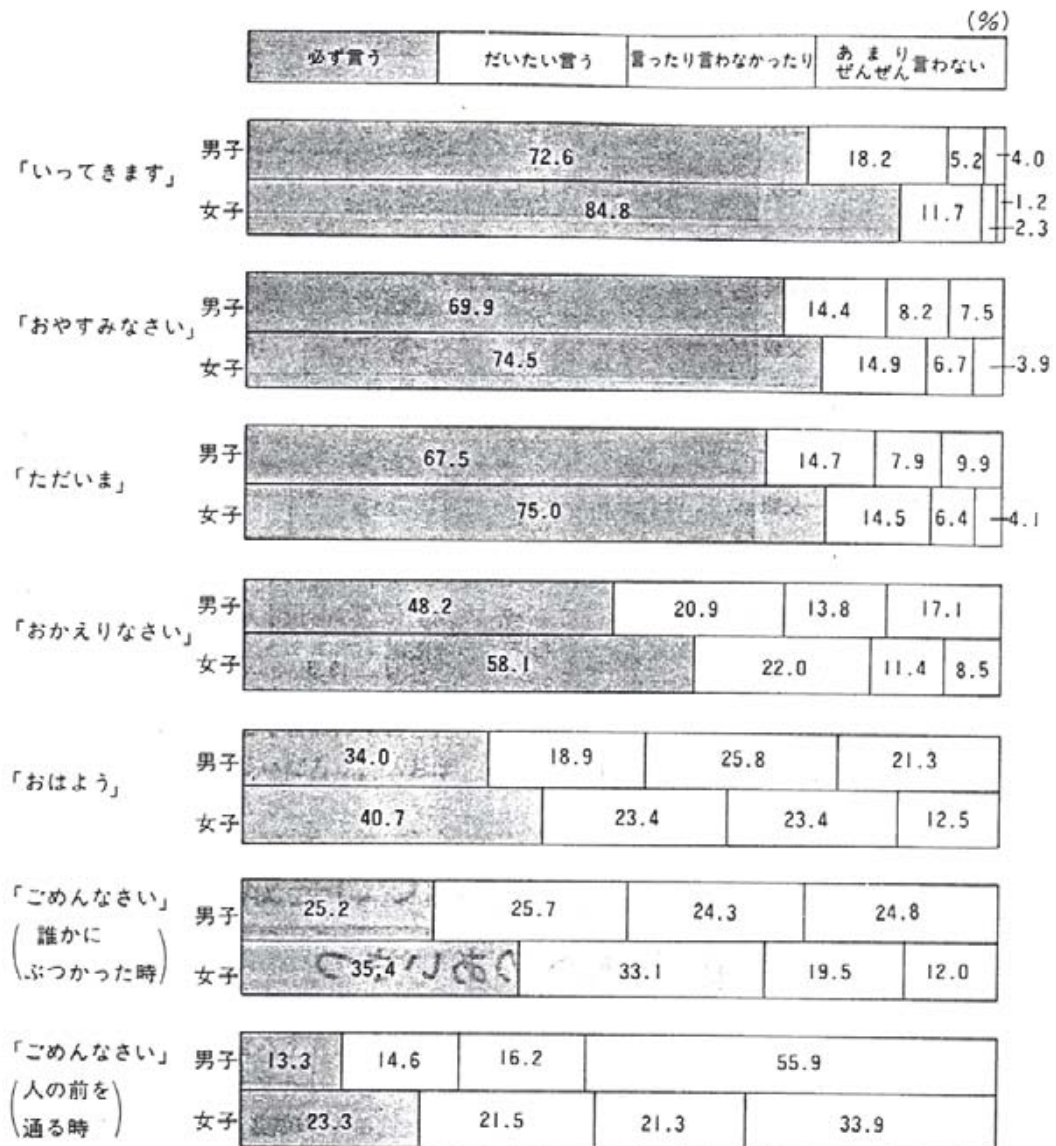
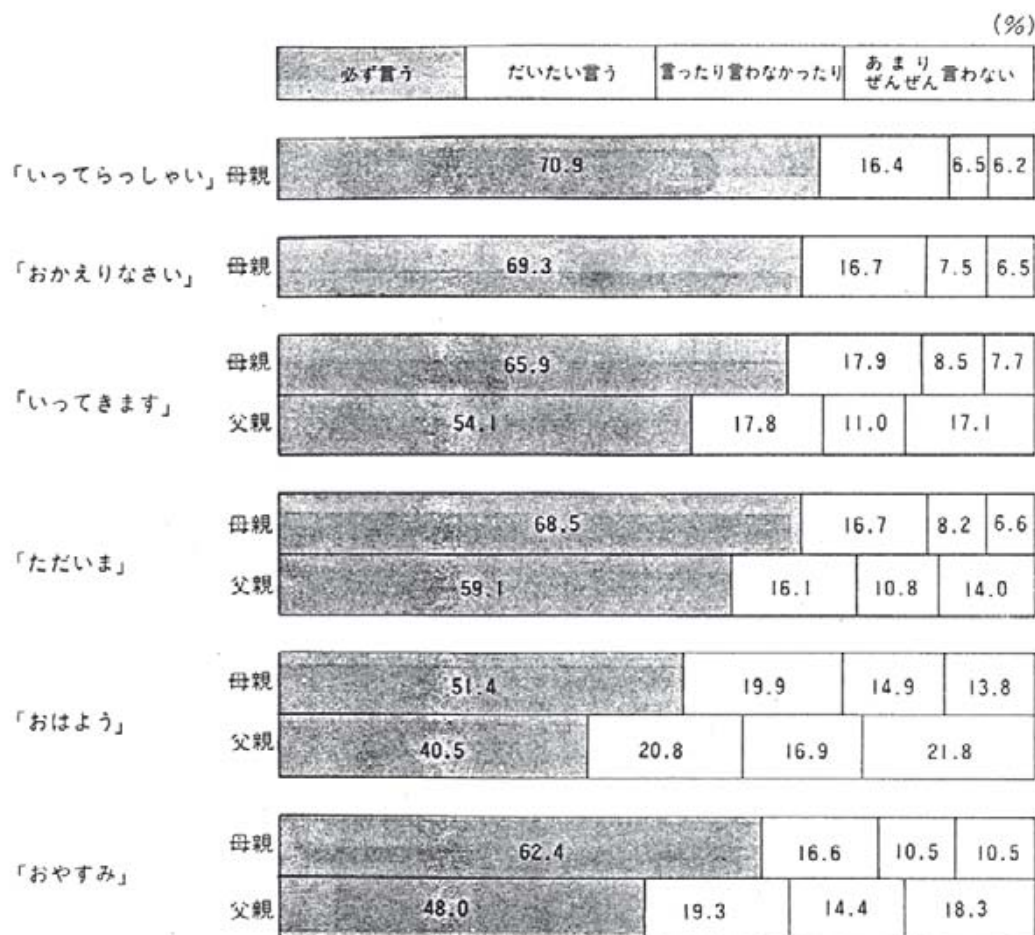


図16・家族へのあいさつ(親)



他人へのあいさつ

さて家族を離れて、仲間や先生との間で交わされるあいさつは、どうなのか。

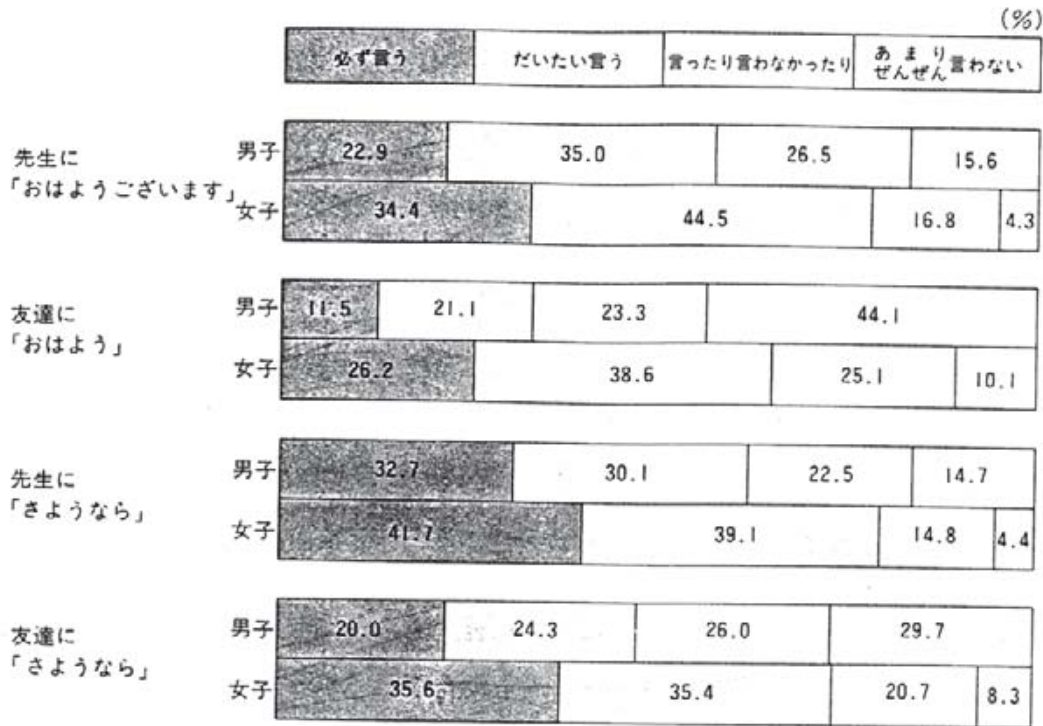
図17に示したように、家族間でのあいさつより大幅な減少を示していることが、まず目をひく。そして先生と友だちでは、また一段と友だちに対するあいさつが悪い。例えば、「おはよう」を必ず言う割合をとってみると、

「おはようございます」

	家族に	先生に	友人に
男子	34.0%	22.9%	11.5%
女子	40.7%	34.4%	26.2%

となっている。本来あいさつは、他人にこそ

図17・他人へのあいさつ



きちんとしなければいけないはずなのに、どうしたことだろう。外国、とくに欧米諸国へ行ってみて、「Good morning」のあいさつが見知らぬ人びとの間で、ごく自然に交わされているのに驚かれた人も多いだろう。「おは

よう」「ありがとう」「すみません」などのあいさつに関しては、われわれはもっと西欧の人びとのマナーを見習うべきではないのだろうか。

成長につれてどうなるか

さてこうした「あいさつ」は、学年を追ってどう身についていくのだろうか。2年、4年、5年、6年と、その完成の度合いはどうなるか。それを見たのが図18・図19である。

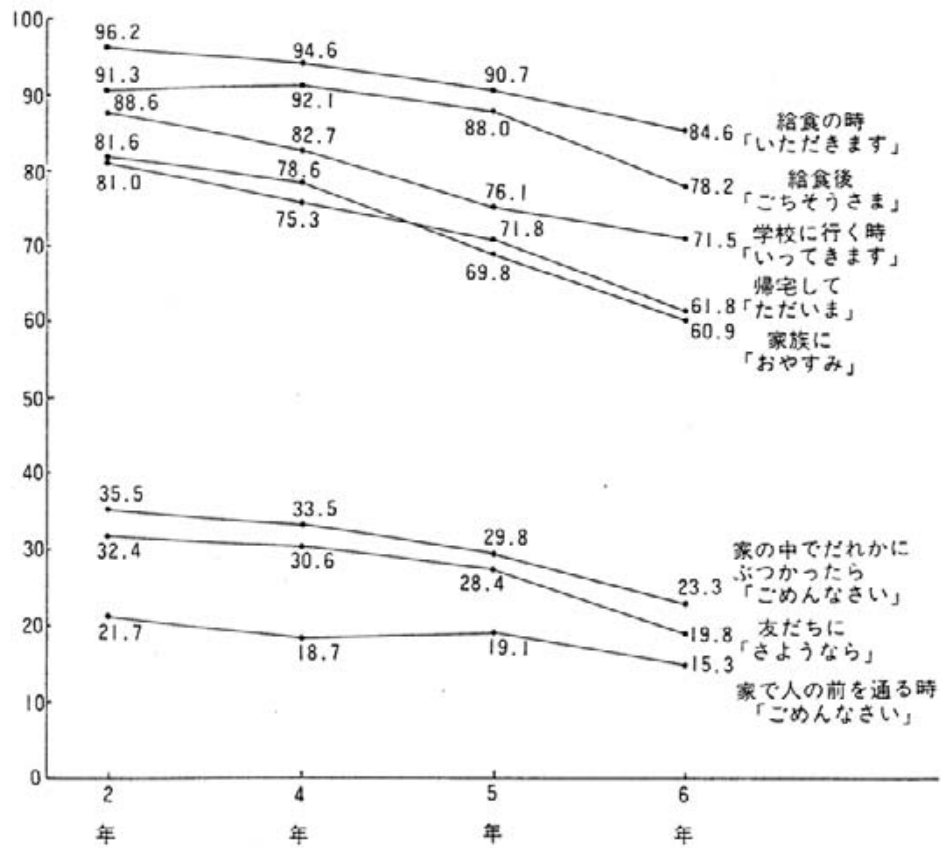
驚いたことに、われわれの予想とは逆に、ほとんどのあいさつの実行率が、学年の上昇にしたがってむしろ低下している。中でも図18の上半分は、2年から6年にむかって、グ

ラフはほぼストレートに下降している。図19は、2年生から4年(5年)に向けて、いったんはグラフの上昇を見るが、そこからやはり学年と共に下降していく。特に上半分の定着率の高かったものがそうである(図18は学年と共に下降する項目を、図19は、いったん上昇し、その後下降する項目を示した)。

このことはすでに1章の「基本的な習慣形

図18・あいさつを「必ず言う」(学年別)

(%)

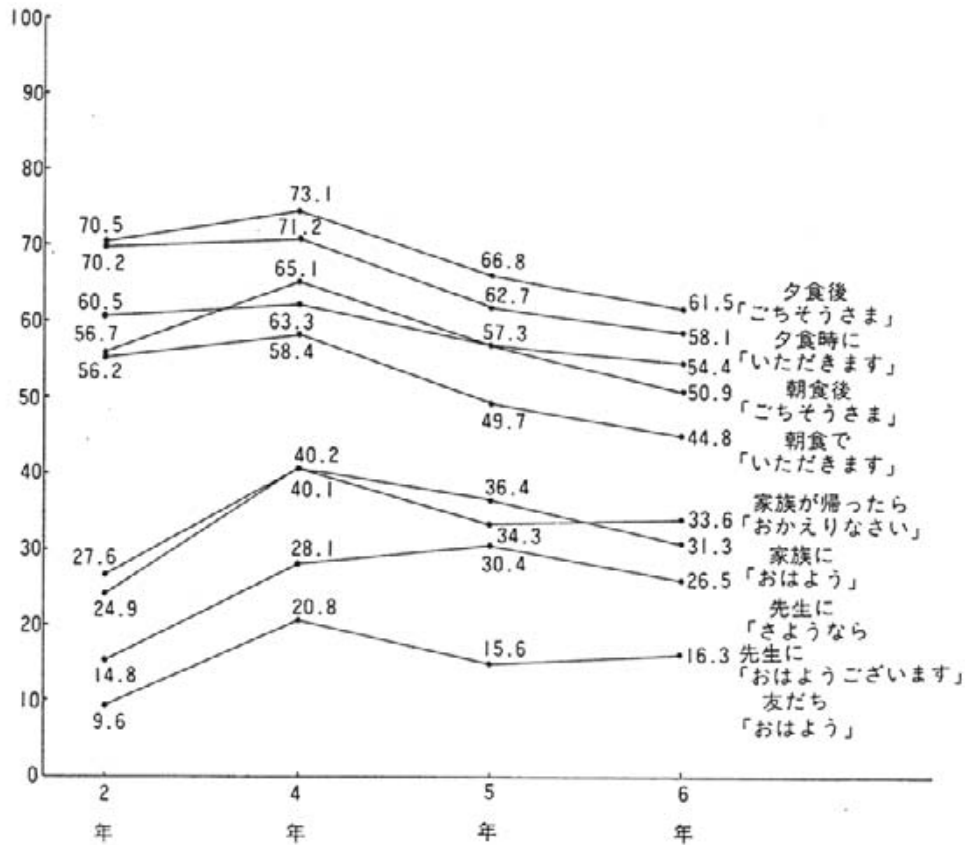


成について」でも見い出されていたが、あいさつの方がその習慣形成の崩れは一層大きい。こうしたしつけの問題点が何からくるものか、

われわれは十分に考えてみなければならないであろう。

図19・あいさつを「必ず言う」(学年別)

(%)



習慣形成と家族の雰囲気

さてこうした習慣形成は、むろん親のしつけによってなされる部分が多そうだが、それ以外に、親が身をもって示す態度、またさらに、その家族が持つ文化的な雰囲気、といったものも、少なからず影響を及ぼしていると考えられる。

その一端を示したのが、表3・表4である。まず表3は、夕食の食卓での「いただきます」に例をとって、父母の行動の関連を見たものである。表に示されるように、ほぼ「いた

きます」を言う母親の夫は、60%がこれまた「いただきます」を言っている。しかし、あまり「いただきます」を言わない母親の夫は82%がやはり、無言で食事をとっている。

他の項目もほぼ同じ結果を示すので、省略したが、要するに家族の雰囲気のようなものがあって、お互いにあいさつし合う家族では、それが自然の形で交わされ、逆に無言の家では、誰もがむっつりと押し黙っている、ということなのであろう。

表3・いただきます(夕食)

(%)


		<母>		
		必ず・だいたい言う	半分半分	あまり・ぜんぜん言わない
<父> 	必ず・だいたい言う	60.1	21.9	8.8
	半分半分	15.9	34.6	9.5
	あまり・ぜんぜん言わない	24.0	43.5	81.7

表4・ごちそうさま(夕食)

(%)


		<子ども>		
		必ず・だいたい言う	半分半分	あまり・ぜんぜん言わない
<母> 	必ず・だいたい言う	67.7	30.8	11.5
	半分半分	15.1	33.9	13.9
	あまり・ぜんぜん言わない	17.2	35.3	74.6

表4は、「ごちそうさま」に例をとったが、このことは母子間でも(むろん父子間でも)言えるようである。表が示すように、ほほいつも「ごちそうさま」を言う子どもの母親は68%が「ごちそうさま」を言うが、ほとんど「ごちそうさま」を言わない子どもの母親は、やは

り75%が、黙って食べ終わる。

このように、「あいさつ」のような社会的な行為は、その家族の持つ「文化」の中で、自然に子どもたちの中に浸透し、習慣化されるとみてよいであろう。